

エミール

平成22年1月13日
(通巻第19号)

発行：三重県児童相談センター
電話059-231-5902

三重県児童相談所における“真実告知&ライフストーリーワーク”の 取り組み(その1)

中勢児童相談所 山本 智佳央

三重県の児童相談所では平成18年度頃から、施設に入所している子どもたちに対して、“真実告知”と“生き立ちの整理(ライフストーリーワーク)”を積極的に行う取り組みを始めています。

まだまだ手探りの取り組みですが、実践を続ける中で「施設で暮らす子どもたちにとって大切な情報は何か?」「施設の子供たちは、日々(あるいは成長と共に)どんなことを知りたいと思っているのか?」といった、子どもの「知る権利」につながるようなテーマが含まれていることが分かってきました。

今号の『エミール』からしばらくの間、“真実告知”と“生き立ちの整理(ライフストーリーワーク)”をテーマに、取り組みから見えてきたことをお伝えしたいと思います。

第1回は「自分自身の“生き立ち”を整理する必要性」についてです。

一般家庭の場合、ほとんどの子どもは(両親・片親の違いはあっても)自分の生みの親と一緒に暮らしています。子どもたちは、親子の自然な会話の中で「自分の小さかった頃の話」を聞くことがあります。時には年長の兄弟、親戚、近所のおじさん・おばさんから聞く(聞かされる)こともあるでしょう。こうして知ったエピソードが、自分の幼い頃の記憶や思い出となって残っていきます。

ところが施設や里親家庭で暮らす子どもの場合、こんな“当たり前のように思われ

ること”が、なかなか難しかったりします。1番の原因は、子どもにとっての養育者が替わるからです。施設や里親家庭にきた時点で、すでに養育者が替わっています。また施設の場合、職員の異動や担当替えが避けられない事情もあります。

少し極端な例になりますが、親と離れて何年も経つが親と連絡が取れなくなってしまう・施設変更を何度も経験した・施設の担当職員が何度も替わる経験をした子どもたちの中には「自分の“過去”をいったい誰に聞けばいいのか分からない」という状況になっている場合もあります。こうして過去がとぎれとぎれになる・忘れられていく・過去についての情報を手に入れることが困難になっていきます。

自分の“出自”がわからない子どもは、当然“自分＝過去から現在まで連続した存在”という感覚が身に付きません。生活上の不安感・イライラ・自暴自棄等につながりやすいことは想像に難くありません。

施設や里親家庭で暮らす子どもたちの中には、先に挙げたような事情から“生い立ちの整理”を必要としている子が少なからず居ることが分かってきました。私たちは、この作業を「ライフストーリーワーク」と呼んでいます。

ライフストーリーワークの取り組みは、日本では施設より里親家庭での実践が進んでいるようです。私たちの取り組みも、里親家庭での実践から多くのヒントを得ています。

里親家庭では“実子でないこと”“生みの親が別にいること”“あなたが里親の家庭に来ることになった事情”等々、生い立ちに関する様々な告知を強られる場合があります。そんな時、子ども自身が自分の生い立ちを知り、過去を受け入れるための関わりが必要となります。子ども・里親共にしんどい作業になりますが、それでも「自分自身の幼い頃のことを理解することが、今の自分・将来の自分を前向きに受け入れて生きていくためには最良の方法である」という理解に基づいて、子どもに“過去”を伝えていきます。もちろん、現在の養育者である里親と子どもとの間にしっかりした信頼関係があって、初めて成立する作業でもあります。

“生い立ちの整理（ライフストーリーワーク）”に取り組む意義はいろいろあると考えていますが、代表的なものは以下の通りです。

- ・ “自分の過去”を知ること（＝子どもの「知る権利」を守る）

- ・「自分は子ども時代に望まれ、愛されていた」と感じる
- ・「第三者から“価値ある人間”だと思われている」と感じる
- ・子どもの間違っただ認識を修正できること。例えば、実親の養育上の問題・経済的な問題から里親家庭で生活することになった場合でも『自分がかわいくないから・悪いことをするから親は自分を手放した。自分のせいだ』と感じている子は多く、こうした認識を修正することにつながります。

私たちは、施設で暮らす子どもにも同じような作業が必要なのでは？と考えていますが、『どうやら里親家庭と同じやり方ではうまく行かないようだ』ということも感じ始めています。そのあたりについては、改めてお伝えしたいと思います。

参考文献：「Q & A 里親養育を知るための基礎知識」（明石書店）
「真実告知ハンドブック」（家庭養護促進協会）

これまでの経験から活かせること

南勢志摩児童相談所 宮崎 太一

今年度から南勢志摩児童相談所の配属になり、現時点（平成21年12月末）で約9ヶ月が経ちました。児童相談所での勤務は今回が初めてですが、これまでに「知的障害者福祉センターはばたき」の入所施設で生活支援を3年、「三重県立小児心療センターあすなる学園」で心理判定（及び心理療法）を3年それぞれ経験しました。採用された当初から児童福祉分野での心理判定を希望していたため、成人の生活支援という全く経験のない分野であることもそうですが、就職してから初めて独り暮らしをするような自分が、大人の方の生活支援をするということにも戸惑いを感じました。実際、利用者の方の殆どは自分より年上で、生活経験もバイタリティもある方が多く、むしろ教えて頂くことや学ぶことの方が多かったような気がします。ただ、利用者の方たちと生活を共にしたり、農園芸や部品製造などの作業を行ったり、地域での生活先や資源を探しに行ったりしたことはとても貴重な経験でした。児童相談所の仕事においても、子どもたちの進路や将来の生活について考える上で、具体的なイメージや見通しを描くための一つの材料にしていくことができると思います。

あすなる学園の臨床心理室での仕事は、今の児童相談所での仕事と重なる部分が多くあり利用するツールや手段も共通していましたが、仕事のやり方や目的については

異なる部分が多くあるように思います。児童相談所では子どもの状態について直接説明を求められる機会が多くあり、その相手や目的を意識しながら説明の仕方を考える必要もあります。また、子どもを理解し支援するための関わり方についても自分で組み立てていく必要があり、特徴を理解するためにどのような検査や面接を行うべきか、面接の中でこの内容を投げかけてよい時期や機会はいつ頃か...といったことに日々頭を悩ませています。診断補助のための検査や、どちらかと言うと現実原則から離れた治療空間では経験しなかった種類の難しさも多くありますが、子どもを理解しようとするための物事の見方や関わり方は、あすなる学園での経験の中で教えて頂いたことがとても多くあるように思います。

もちろん、3年ずつの短い期間でそれぞれの仕事に充分習熟できたとは言えませんが、重要なことを経験する機会や環境にかなり恵まれていたことや、色々なことを教えて頂いた先輩方への有難さを改めて感じていますし、今の職場でもそれは同じであると思います。今後も、これまで身につけてきたことを意識しながら、今の自分に足りない技術や発想を身につけていきたいと思っています。

児童相談所に戻ってきたの雑感

中勢児童相談所 岡村 広志

ポリバレンタ

このたび、八年ぶりに児童相談所勤務を拝命しました。かつて児童相談所にいたころは、措置という形で子どものケアをお願いする立場でした。その後、措置された子どもをお引き受けしてケアワークをする立場も経験し、また大人の方の相談を受ける立場や多くの事務作業をする立場も経験させていただきました。そして改めて、子どもに接したり、措置という形で子どものケアをお願いしたり、という立場に戻った次第です。

子どもの支援に携わる職員は、事務の立場から、相談支援をする立場、子どもに向かい合ってケアワークをする立場まで、それぞれ専門性を持ちながら、局面に応じてさまざまな立ち位置をとることが求められます。その時には「子どもの最善の利益を保障する」ことに向かって、チームを組んで関わる必要があります。チームワークをつくるためには、相手の立場を踏まえつつ、時には大人同士厳しいやり取りをしたり、時には相手が活躍しやすいように配慮したり、といったことが必要かと思っています。

前サッカー日本代表監督の伊ビチャ・オシム氏は、さまざまなポジションをこなせ

る選手のことを「ポリバレント（化学用語で「多価」）な選手」と呼んでいたと言います。ただ単に「さまざまなポジションを器用にこなす」ということにとどまらず、相手の立ち位置や意図を理解しながら、チームの勝利という目的に向かって、チームメイトとつながりあう力をもつことが大切だ、という意味ではないかと思います。

これまでの仕事の中で経験してきたさまざまな立場・立ち位置は、一つ一つ貴重なものでした。これからの仕事においては、一緒に仕事をする大人同士でうまくつながりあうことが課題かと、今感じています。「ポリバレント」な児童相談所職員をめざして！

根っこ

時々、事務所内に飾られている観葉植物の鉢植えを、勝手に（？）手入れしています。なんだか元気のない植物を鉢から引きずり出してみると、中では伸びきった根が渦を巻いている、という姿を見かけることがあります。伸び過ぎた部分を切り落としたり、渦を巻いた部分を伸ばしてみたりした上で一回り大きな鉢に植え替えると、元気を取り戻して葉が伸びてくることもしばしばです。

「木の絵を描いてください」という心理検査がいくつかあります。「木を描いてください」とだけ教示するもの、一連の流れの中で「木を描いてください」と教示するもの、流儀はいろいろあります。木の根そのものを主に描く反応は少ないですが、検査の受け取り手としては幹や葉だけでなく根っこがどんな様子なのかを想像するのも大事かと、鉢植えに触れながら感じさせられることがあります。

見えない根っこが伸びやかになることで、見える場に現れる幹や葉も元気になっていくことは、私たちの生活や子どもたちの育ちにも示唆を与えるように思います。自らも、来所される方も、「根っこを伸びやかにする」すごし方ができるように願いつつ…。